

疫学（臨床）研究 実施 についてのお知らせ

大阪市立大学大学院医学研究科 発達小児医学

【研究課題名】

定期外来通院からドロップアウトしたターナー女性 11 名の臨床像

【研究期間】

倫理委員会承認後(2017年3月)～2017年12月31日

【研究の意義・目的】

(1) 目的

ターナー女性には女性ホルモン補充や、心血管合併症管理など生涯にわたる医療介入が必要だが、実際は通院を自己中断してしまう症例を経験する。このようなドロップアウト症例の臨床像を明らかにし、ドロップアウトを未然に防ぐ方策を構築することを目的とする。

(2) 意義

ターナー症候群は X 染色体の欠損を原因とし、頻度は出生女児 1/2000 程度である。低身長を契機に小児期に診断されることも多く、低身長に対しては成長ホルモンの適応となる。卵巣機能不全のため二次性徴遅延も診断契機となりやすく、思春期年齢には女性ホルモンを補充して二次性徴を導入する。しかし卵巣機能不全や心血管病変は生涯にわたる重要な健康問題で、女性ホルモン補充や高血圧管理など、継続した医療介入を必要とするが、実際には定期通院を自己中断してしまう例を経験する。ターナー女性はメタボリックシンドロームのリスクも高く、特に大動脈解離などの心血管病変は生命予後を左右する。逆に、適切な医療介入は健康寿命の延長につながる。よって、どのような症例がドロップアウトのリスク群なのか、そして将来にわたってドロップアウトをさせないために小児期から医療者が介入できることを探求することが重要と考え、本研究を計画した。

【研究の方法】

大阪市立大学医学部附属病院に保存された診療録を後方視的に検討する。ターナー女性のドロップアウト症例のうち、診療期間 1989 年 8 月 1 日～2016 年 6 月 1 日を対象とする。対象症例の年齢、治療内容、合併症、心理社会的背景などの臨床情報を集積・解析する。

【研究組織・研究代表者】

大阪市立大学大学院医学研究科 発達小児医学

所属 小児科・新生児科 講師 氏名 濱崎 考史

【本研究に関する問い合わせ先】

研究責任者：濱崎考史

住所：大阪市阿倍野区旭町 1-5-7

電話：06-6645-3816

FAX：06-6636-8737

E-mail：hammer@med.osaka-cu.ac.jp